

(様式4)

教育研究グループ「研究結果」報告書

報告日 令和2年4月30日

グループ名	東村山市立青葉小学校研究会	フリガナ イトウダイスケ 代表者氏名 伊 東 大 介
学校名 (代表者)	東村山市立青葉小学校	電話番号 042-391-8110
研究テーマ	「進んで学ぶ子」を目標に個人課題をもって研究を進める	
研究期間	平成31年4月1日から令和2年3月31日まで	
研究結果 の概要 ※詳細は別 紙により 報告	<p>青葉小学校では、2018（平成30）年度より、校内研究のテーマを教師一人ひとりが個人課題として設定することとした。具体的には、学校教育目標の重点目標である「進んで学ぶ子」について、どのように具現化するか、教師各人が個人の課題を設定するということである。学校統一のテーマではなく、個人課題（テーマ）の設定に至ったのは、以下のような、校内研究にみられる問題点を克服しようと研究推進委員会で話し合われたことによる。</p> <ul style="list-style-type: none">・（統一のテーマだと）押しつけられたものという意識から、受動的になり、誰かに任せてしまいがちになる。・自分の課題意識と合致しないと、その場限りで終わってしまい、何も残らない。何のために研究しているかがわからない。・そのテーマに興味関心のある教員や発言力のある教員のための議論になり、周辺化する教師が出てしまう。 <p>さらに、「専門職（高度専門職業人）としての教師の学び」「学び続ける教員（像）」（2012中央教育審議会答申）を実現するためには、教師一人ひとりの課題意識と学びを大切に必要性があるという考えに至った。専門職としての教師が「何のために学ぶのか」「何を学ぶのか」「どこで学ぶのか」という問いに対する一つの答えが、個人課題の設定である。個人課題を設定して研究を進めるには、同時に職員の間を高めることが必須である。教室で子どもたちが、お互いを信頼して学び合う前提として、職員も同僚を信頼し、お互いを尊敬し、自分の課題について話し合ったり、悩みを相談し合う中で教員の学びが深まっていくことは論を待たない。まず教師自身が個人課題を通して「主体的・対話的で深い学び」を実践的に理解することは、児童の学びの充実に資することである。</p> <p>個人課題に基づく校内研究は、まだまだ暗中模索の部分が大きい。今回のまとめは、その2年目の記録である。この記録から、軌道修正を行いつつ、教師一人ひとりの学びが充実することによって、青葉小学校の教育力が向上し、日本・世界の未来を担う子どもたちがよい学び手に成長することが校内研究の成果と考えている。</p> <p style="text-align: right;">東村山市立青葉小学校研究会</p>	
その他 特記事項		

1. 個人課題導入の経緯

校内研究に個人課題を導入した経緯は、次のようなものである。

「(校内) 研究を進める中で、次のような疑問が生じてきていた。

まず、児童の実態から研究テーマを決めるという手順は大事にしてきたつもりだが、果たして、その実態というのはどの程度『学校全体』の実態なのであろうか。確かに、算数の学力も付けたいが、国語の力を付ける方が先のクラスや児童もいるだろう。また、児童にアンケートを取ったからと言っても、取りようによっては、先に主題が決まっていて、後付の理由になることもあるだろう。『算数の力も付けたいが、国語の力も、社会の力も、体育の力も付けたい』、『たまたま今年は算数の力を付けたいと思っている教員が多いから、あるいは算数を主題にしたいと思っている教員の話が説得力があったから算数にしよう』、などというように考えると、児童の実態に基づいて研究の内容を決定していくとはどのようなことなのか、ということである。国語の指導に取り組みたいと思った教員が国語の研究ができずに、しつこく算数に取り組むなどということは、学校現場ではよく見られる光景である。また、専科や特別支援教室の教員にとってみれば、教科を限定した校内研究の取り組みには、距離を感じざるを得ないだろう。

次に、教員のライフステージに合わせた研究ができているのかということである。新規採用の教員も、50代のベテランも、今年度異動してきた教員も、同じ研究主題で取り組むことになる、これが果たして、その時期にその教員が取り組むべき課題なのであろうか。そして、自分の取り組みたい研究内容とはかけ離れた内容に取り組まざるを得ず、研究への意欲は低下し、前向きになれない・・・まさに、教員の「関心・意欲・態度」の評価が△になってしまうのではないかという「実態」である。

また、「研究テーマを決めてもらわないと、何をしたらいいかわからない」という声も聴くことがある。教師として、日々の実践の中で研究テーマをもたないということは考えられないが、恐らく、そのような課題意識をもっていないのであろう。

このようなことから、2018年度からは「個人課題」を設定し、それを追究していく取り組みを始めてみた。」

このような経緯で取り組むことになった校内研究における個人課題の設定であるが、1年目の年度末反省では、取り組んだ教員個人の反省をもとに研究推進委員会で話し合った結果、「個人課題については、教員一人ひとりが前向きにとらえており、実施上の課題は見られるが、次年度もこの方針で継続する」ということになった。資料として、2018年度の個人課題一覧表を示す。

2018 校内研究「進んで学ぶ子の育成」 個人課題一覧 20180910(月) 現在

氏名	課題(テーマ)
	「支持的風土のある学校・学年・学級づくり」
	副校長としての「進んで学ぶ子の育成」とは

	自信をもって自分を表現できる子の育成
	主体的・対話的に学べる授業づくり
	児童の「自己教育力」を高めるための授業づくりと支援の手立て
	ストレスフリーな授業づくり
	児童に自信をもたせる授業づくり
	「児童が思わず話し出す授業の工夫」
	「すすんで学ぶ」授業の形式の模索
	「外国語を楽しく表現する学習形態の工夫」
	「アクティブラーニングを取り入れた指導法の工夫」
	「児童が友達と共に学び、自ら学ぼうとする意欲を高める授業の工夫」
	体育を生かし、自主的に行動できるような学級づくり
	「内発的動機付けを高める指導と評価の工夫」
	主体的に活動できる授業づくり
	「自分の考えを持ち、表現する児童の育成」一書く活動を通してー
	「全生園」を通じた人権学習
	「自己解決・自己取組」考える力
	「外国語を学ぶことに楽しみを見出せる学習」
	「主体的・対話的な学びを目指した学習活動の工夫」
	「安心して学校生活を送るための、自己認知を育む授業づくり」
	「個に応じた指導方法」
	「特別支援教室での指導の研究～日常生活への般化を視野に～」
	○くんが自分の気持ちを言葉で話せるようになるための支援
	いい音みつけて 表現できる子
	高学年が思いをこめて描ける平面作品
	学んだことを進んで家庭生活に生かそうとする児童の育成
	「心と体のつながりに気づかせる健康相談活動」
	人とかかわり、主体的に学ぶ子を育てる算数の授業づくり

表1 青葉小学校 2018年度個人課題一覧

2. 「個人課題の変遷」、個人内での「個人課題の変遷」から

2019年4月、個人課題の取り組みは2年目を迎えた。2年目の個人課題は次の通り。

2019年度校内研究「進んで学ぶ子の育成」 個人課題一覧 20190909(月)現在

氏名	課題(テーマ)	グループ
	「進んで学ぶ子」の育成のための校内研究の充実	
	「進んで学ぶ子」の育成に向けての副校長の役割	
	「ストレスフリーな授業作り」	
	「学級会を中心とした学級経営」	
	「表現力を育てる指導の工夫～かく・話すからはじめる児童の育成	

		をめざして～」(算数)	
		「友達と関わりながら学び合う授業の工夫～お客様の児童を作らないために～」	
		「説明文における主体的・想像的に取り組む授業の工夫と手立て」	
		道徳科における主体的・対話的での深い学びとは何か	
		「信頼ベース実践への移行」	
		「ストーリーテリングを用いた中学年における英語の学び」(外国語) 「小学校英語活動を充実させる校内研修について」(外国語) 「教科内容を生かした CLIL 的教材による授業の可能性」(外国語) 「学びの土台とは何か。～主体的に取り組む児童の変容を追って～」 (学級経営)	
		児童がすすんで学ぶ学級経営 学級新聞づくりを主軸に据えて	
		「子供たちが考えて行動するための学級経営」	
		「子どもが主体的・協働的に学ぶ学級・授業づくり」	
		「思いを行動に表せる子を育てる～道徳を通して～」	
		「学級経営 体育」	
		自分の考えを伝えることができる児童の育成	
		「主体的に活動できる授業づくり」(書く)	
		「自分の考えを持ち、表現する児童の育成」ー書く活動を通してー	
		「人権を大切にし、生活につなげていける学級経営～書く活動の充実～」	
		「教員一人一人が意欲的に働けるけやき教室の運営方法を考える」	
		「個に応じた指導」 ほめることを意識して	
		「一人ひとりの特性を把握して、それに応じた支援をする」	
		「Aくんが、安定した気持ちで学校生活を送るための支援」	
		「けやき教室でできること、求められていることにどのように答えていくのかを知る、深める」	
		「いい音みつけて表現できる子」～グループ学習を通して～	
		自分の思いを表現する図工・こだわりが強い児童も満足して制作できる図工	
		「安心感のある保健室」	
		「人とかわり、主体的に学ぶ子を育てる算数の授業づくり」 「教職員が主体的に学ぶ校内研究」	

表2 青葉小学校 2019年度個人課題一覧

2019年度は、複数の課題を設定する教員が見られた。教科指導と学級経営を分けて設定する、教科指導と校内研究に関わる内容を2つ設定するなどである。

また、「グループ」という欄が追加されているのは、今年度より「グループによる研究の推進」を始めたからである。これは、個人課題を設定した教員が ABCD の4つのグループに分かれ、相互に関わりを持ちながら課題に取り組んでいくというシステムである。グループは、①課題の内容②校務分掌・担当学年③教職経験年数・ジェンダーなどを勘案して編成した。これにより、「職員室の誰にでも、あるいは、学校内にこだわらず、広く意見を聞いて学んでいくスタートライン」を引こうと、研究推進委員会では考えているところであるが、これもどのような形が良いのか模索中である。

3. 個人課題の取り組みへの「自己評価」と今後の展望

二人の教員に、個人課題の取り組みについてインタビューを試みた。以下、そのインタビュー内容である。

①A 教諭

「昨年度から今年度にかけての個人課題を中心にした校内研究はどうですか？」

「個人課題に取り組んでみて楽しいです。やってみたいことを継続して、いろいろ考えて変えながら、今までは何となくだったけど、子どもや自分に足りないものを考えて、本を読んだり、他の人の授業を見たり、他の人の意見を積極的に取り入れてみたいなど。今年は持ち上がりで、改善点も見えるというのもあるかもしれません。」

②B 教諭

「昨年度から今年度にかけての個人課題を中心にした校内研究はどうですか？」

「個人課題のシステムは、自分がやりたいことができ、教科だけではなく、人権や平和といった普遍的なものにもとりくめるところがいいですね。あと、継続して取り組めるところもいいです。やりたいことがある人にはいい方法ですね。」

「やりたいことがあるというのは？」

「ある程度自分の課題が見えてくる頃の……」

「例えば、中堅・ベテラン向きということですか？」

「そういう感じかも知れません。」

このインタビューに共通することは、

- ・自分の問題意識で課題を設定できる。
- ・課題を変化させながら継続して取り組める。

の2点であり、これは、個人課題の特徴としてとらえられよう。

また、A 教諭には、学びによる自己変革を楽しんでいる点も垣間見られる。これは、児童に「主体的・対話的で深い学び」を求める教師の一つの姿であろう。

そして、B 教諭の『「中堅・ベテラン向き」の方法では』という指摘も深い。確かに、経験の浅い教員にとって、まだ自分の課題が見えない（あるけれど自分で認識できていない）

状態は多くみられ、一緒に研究を進める「伴走者」の必要性は論を待たない。

今回は、個人課題に取り組む中で二人の教員の変化をレポートしたが、個人課題への取り組みについては、これ以外のパターンもあり、また報告したいと思っている。

4. おわりに

原田（2019）は、東井義雄『培其根』（昭和41年9月発行）の以下の内容（下線部）を引用し、「現場の教育学」の重要性を主張している。

「教育」は、結局「ひとり」「ひとり」の確立である。いくら上手い授業をやったところで、うまいは発表会をやったところで、りっぱに見える体育会をやったところで、それが「ひとり」「ひとり」の確立につながらないのでは、「教育」とはいえない。

この東井義雄の言葉から、

「ひとり」「ひとり」は、「ひとり」「ひとり」それぞれの事情をもっている。「教育学」も「心理学」も「教授学」も、一般的なことを教えてくれても、「ひとり」「ひとり」の個人的事情に適応する方法までは教えてくれない。しかし、この「ひとり」「ひとり」の個人的事情にまでふれていき、それに適合する方策を考えていかなければ、「ひとり」「ひとり」の確立は望めない。

と原田は述べている。

また、現場の教育学について、石井（2017）は「良質かつ硬質の理論を核として形成された「現場の教育学」こそが、表面的な改革に左右されない、専門職としての教師の自律的で手堅い実践の基盤となるのです。」と述べている。

ここに通底することは、やはり、教師の学びは児童と同じ様に「ひとりひとり」であるということである。教師一人ひとりの成長なくして、学校全体の「成果」「課題」を論じることはできないであろう。

また、校内研究において個人課題に取り組んでみて改めて感じたことは、このような研究方法、すなわち、あまり「市民権」を得ていないようなスタイルでの研究を行う際に、管理職の理解が非常に大きいということである。管理職にとっても、周囲の学校と同じようなスタイルの研究であれば、ある意味「安心」できるかもしれない。教員から「このような方法で校内研究を進めてみたい」という声に「そのやり方でやってみましょう」と言えることは、なかなかできることではないように思う。まさに、管理職と教員との信頼の度合いが問われると言っても過言ではない。

これは、学級経営にも全く同じことが言える。「君たちの考えたやり方で試してごらん」と言われた児童は、喜々として取り組み、自分たちの「結果」を出すであろう。自分で考えて、自分でやってみて、自分で振り返る、ことで子どもたちは成長していく。これは、まさに、子どもの学びと、教師の学びの同型化である。

最後に、本校の学校だより7月号の校長の文章を引用したい。

「進んで学ぶ子」は、進んで学ぶ教師の下で育つ 校長

現在青葉小学校では、教育目標の「進んで学ぶ子」の育成に重点を置いて教育活動を行っています。校内の全教員で定期的に研究会を設け、授業を公開し、意見交換を行い、よりよい授業のための更なる改善方法は何かを探っています。

学級の子どもの実態から「友達との学び合い」や「学び合いのできる学級」、「振り返りを大切にした授業づくり」など、「進んで学ぶ子」を育てるための課題を各教員が設定し、課題解決のための様々な手だてを考え実践していきます。

教員は、4つのグループに分かれ、授業公開前の指導法の検討、授業公開後の協議を通して、子どもにどのような学びの姿が見られたのか、子どもの学びがより深まるには何をするとよいかなどを検討し、今後、授業実践を積み重ねていきます。

4月から取り組み始めて3か月ほどですが、子どもたちは確実によい変化を見せています。話し合うときの約束や手順を理解し、ファシリテーターの役割ができるようになってきた子、分からないときに「分かりません」「教えて」と素直に発信し、友達や先生に助けを求め、学習内容を理解しようと努力している子、ノートに自分の考えを書いて発表しようとしている子、絵や作文などの作品に自分の思いを表現しようとしている子など、一人一人の変化が現れてきました。

青葉小の教員は、一人一人の子どもの可能性を引き出し輝かせるために、教員自らが進んで学ぶ姿を示しています。時間はかかるかもしれませんが、いずれ青葉小の子どもにもその思いや姿が伝わり、「進んで学ぶ子」に近づいていくと考えます。

平成29年に告示された新学習指導要領では、「主体的・対話的で深い学び」の視点から「何を学ぶか」だけでなく「どのように学ぶか」も重視して授業改善することが示されました。校内研究を通して教師自身がまさに「主体的・対話的で深い学び」を体験しています。この校内研究での学びを日々の授業につなげ、子どもたちが共に考え、学び、新しい発見や豊かな発想が生まれる授業となるようにしていきます。

「進んで学ぶ子」は、進んで学ぶ教師の下で育つのです。

校内研究における個人課題の取り組みは、教員一人ひとりが成長するために、効果的であると思われるが、さらに取り組みを進め、実証的に報告したいと考えている。

この別紙の内容は、東村山市立青葉小学校の校内研究の取り組みの実践報告の要約版である。詳しくは、下記を参照されたい。

伊東大介・栗原由紀（2020）校内研究における個人課題設定の実際と今後の展望
東京学芸大学教職大学院年報第8集